
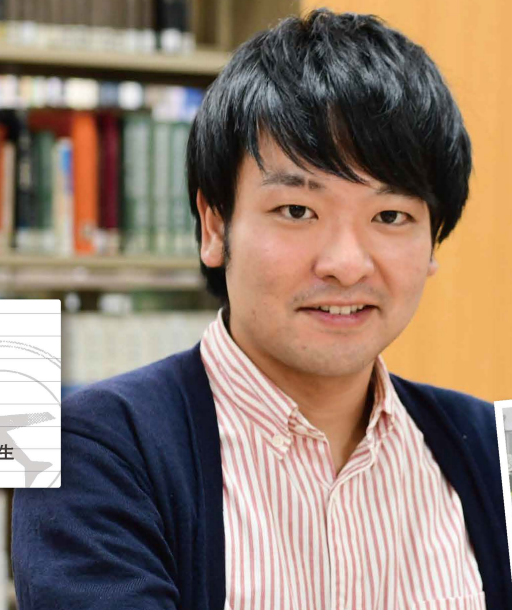




Name 原田 一慶

Major 工学研究科
生物学専攻

 2017年 モナシュ理工系夏期研修 修了生



研究室のメンバー達

行動しない臆病な自分からの卒業、 海外志向の向上

私の親は、日本国内に留まるよりも海外に出て様々な考え方や価値観を吸収すること望んでおり、将来は海外に出ることを積極的に勧めてくれました。しかし、私は海外に対して日本語が全く通じない異世界のようなイメージを抱いており、不安から来る抵抗感が潜在意識にありました。そのような抵抗感を持ったまま学部3年の時に初めてモナシュ研修への留学のことを知りました。しかし、潜在意識にある抵抗感が邪魔をし、参加に一步踏み出せていない状況でした。行くべきなのは間違いない、けど行ってずっと一人で閉じこもってしまったらどうしよう、そんな葛藤を抱え悩んでいました。しかし、もしもここで留学に参加しなければ、この先もこの抵抗感が拭えず、海外に出ることに意欲的になれないのではないかとそれは凄く勿体無いことだし、嫌だなと思いつきました。そして、一步踏み出してモナシュ研修への留学に参加することにしました。

いざ留学に行ったのはいいものの、やはり最初は楽しいと思えるものではありませんでした。自分の想像以上に早いスピードの英語で話しかけられ、返答を求められたとしても英語が全く出てこない。会話が出来ないために、現地の友人を作ることが出来ませんでした。そうした現状に苦しんでいるうちに、自分の留学生活を楽しめるものへと変えてくれる転機が訪れました。それは、日本語の授業を受講している現地の学生に講師として日本語を教えるという授業に参加したことでした。そこで知り合った学生は日本文化に興味があり、他言語を話す大変さを理解してくれています。そのために会話をする時も、拙い英語でなんとか話そうとしている自分に対して理解しようとしてくれ、英語が聞き取れなくて聞き返したとしても嫌な顔一つせずに繰り返して話してくれました。そして、お互いの文化に対して興味があることから、会話も尽きず自然と仲を深めて行くことが出来ました。その友人達と話をしているうちに、次第に英語を話すことが楽しいものになっていきました。自分が成長できているという実感を得られたことが何よりも嬉しかったです。そして、モナシュ研修でのこの経験が自分の海外への抵抗感を払拭し、もっと海外に出てみたいという気持ちへと変えてくれました。

私が所属する専攻では、修士1年の夏に約1カ月半の現地の研究室で研究をする海外フィールドスタディSというものがあります。

モナシュ研修以降、海外へ行っていなかったためにこの話を聞いた時は、抵抗なく直ぐに参加を希望しました。タイへの留学ではモナシュ研修の経験が凄く活かされていたと思います。英語を話すことに対する抵抗が消えているために、自分から積極的にコミュニケーションを取ることが出来ました。現地の研究室のメンバーだけでなく、自分の寮の受付でアルバイトをしていた学生などとも友人になることができ、モナシュ研修の時以上に充実した生活を送ることができました。

私は大学生活で経験した2度の留学から、海外という環境で色んな人と触れ合う楽しさを覚え、将来は海外で働く機会を持ちたいと考え、海外で働くことができる環境が整っているということのを第一の軸、自身の専門に関係することを第二の軸とし、自身の経験を存分に発揮して就職活動を行った結果、外資系の食品メーカーから内定を頂くことができました。



✈ Study Abroad Information

短期研修

モンクット王トンプリ工科大学&カサセート大学 (タイ)
2019年8~9月 (5週間)
留学時: 修士1年生

費用内訳

- 参加費: 約22万円
- 滞在費: 現地大学が寮やアパートを用意
- 奨学金: 約14万円 (JASSO)、約2万円 (大阪大学)

<海外フィールドスタディSとは>

大阪大学生物工学国際交流センターが主催している夏期短期派遣プログラム。タイのモンクット王トンプリ工科大学、チュラロンコン大学、カサセート大学、マヒドン大学のいずれかを訪問し、自身の研究計画に基づき、バイオテクノロジーに関してラボでの実習を中心に研修を行う。各学生が海外において自らの専門性を発揮するための基礎的な力を養うことを目的としている。